

もう一つの石組井戸

高松城下では、高松中央郵便局の東側に位置する高松城跡（厩跡）でも類似した石組井戸が見つっています。四周を4段の石積みに囲まれており、その大きさは東西約3.90m、南北約5.80m、高さ約1.60mです。常に水が湧き出し、深さ50cmも水がたまっていました。南側には東西7.40m、南北2.10mの踊り場が設けられ、そこには玉砂利が敷き詰められていました。時期は17世紀初め～17世紀後半頃で、今回見つかった井戸と近い時期に築かれており、初期の城下町に伴う施設だと考えられます。



高松城跡（厩跡）の石組井戸（南から）

おわりに

高松城下では2例目となる大型の石組井戸の発見で、城下町における水利用の実態の一端が解明されました。高松城下は全国的にも先進的な上下水道が整備された街であるとともに、雨の少ない気候風土とも関連して水の管理には、多大な労力を要しました。地道な発掘調査の成果を積み重ねることで、地域に根付いた歴史の痕跡を蘇らせる取組を、今後も継続していきたいと思えます。

編集後記

今号は江戸時代の武家屋敷で見つかった石組井戸を紹介しました。高松市内には大井戸や亀井戸といった江戸時代の上水道に関連した大型の井戸があります。発掘調査は新たな歴史を明らかにすると同時に新しい謎を生みます。考古学という学問の魅力です。皆さんもここにきて謎解きに挑戦してみませんか。（K.N.）

むかしの高松 2020年3月 第32号

編集発行
高松市埋蔵文化財センター
高松市番町一丁目5番1号
tel 087-823-2714
<https://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/kosodate/bunka/maizobunkazai/index.html>



江戸時代の武家屋敷探索

高松城跡（丸の内地区）

城下町の発掘調査

今回紹介する高松城跡（丸の内地区）は、高松城中堀の南東側にある遺跡です。江戸時代には、中堀と外堀の間に上級武士の武家屋敷が建ち並んでいました。

大型石組井戸（水場）の発見

2017年に実施した発掘調査で、江戸時代の遺構、遺物が出てきました。その中で最も注目すべき遺構が、大型石組井戸です。海水面以下の標高で湧水もあり、湿潤な環境であったことから水場の可能性を想定しました。



讃岐高松城下絵図（高松市歴史資料館所蔵）に加筆



調査地周辺の風景と高松城



石組井戸の上面とサイズ



石組の様子

武家屋敷の生活

石組井戸の中は、発掘調査の最中にも、常に水が湧き出していました。こうした環境のため、通常は腐朽して残りにくい漆碗、荷札である木簡、下駄、櫛、曲物などの木製品がたくさん出土しました。陶磁器や瓦とともに、江戸時代の上級武士の生活の一端を復元する重要な手がかりとなります。

石組井戸の役割を考える

発掘調査でわかった石組井戸の特徴は以下のとおりです。

- ①周囲を1段～2段の石積みで囲う
- ②一辺5m以上の大型の施設である
- ③底面の標高は0m以下で、下からも常に水が湧き出る
- ④17世紀中頃に築かれた
- ⑤18世紀初頭ごろに使わなくなり、埋め立てられた

①～③から、何らかの形で水を利用する施設であった事が考えられます。また、その規模は大きく、多量の水の使用や備蓄を必要とした施設であることが想定できます。これまでに、類似した遺構について水を用いた祭祀関連施設や地下室、あるいは防火水槽としての性格が推測されていますが、石組井戸の役割を特定するには至っていません。

近い時期の高松城下の様子を描いた史料を見ても、大型の井戸状の表現を見出すことはできません。今後の発掘調査でどのような場所に、いつ、どの程度配置され、どのような変遷を辿ったのかを詳細に検討する必要があります。



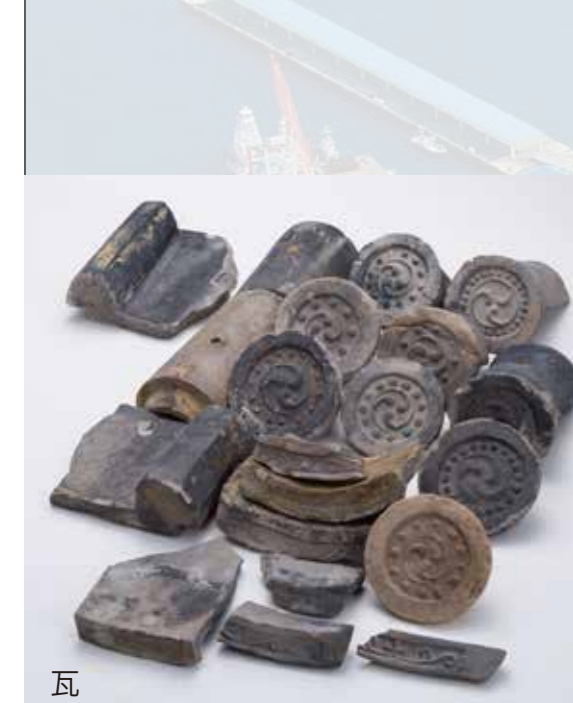
高松城下図屏風（部分）香川県立ミュージアム所蔵に加筆 ※画面中央やや左上が調査地



発掘調査の様子



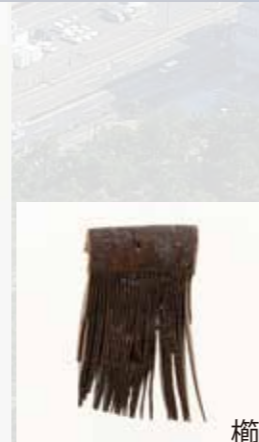
陶磁器



瓦



漆碗



櫛



曲物（容器）

